

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	言語教育研究センター(教務機構)
大項目	4 教育研究組織
中項目	
小項目	4.0.1 大学の学部・学科・研究科・専攻および附置研究所・センター等の教育研究組織は、理念・目的に照らして適切なものであるか。
要素	教育研究組織の編制原理 理念・目的との適合性 学術の進展や社会の要請との適合性 (KG1)研究活動の状況
小項目	4.0.2 教育研究組織の適切性について、定期的に検証を行っているか。
要素	

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 社会環境や学生の教育ニーズの変化、学部増等に対応するため、センター運営組織体系を2013年度を目途に見直す。	→言語教育研究センター運営組織体制の確立。	C	B	B	B	B
2. 地域社会への貢献のため、中・高英語担当教員を対象とした教育プログラムを、現行の1.3倍の規模に拡大する。	→中・高英語担当教員対象のセンター教育プログラムへの参加者数。	B	B	B	B	B
3. 英語を始めとする言語教育において言語運用能力の涵養に重点を置いたプログラムを提供することで応える。	→インテンシブ・プログラム受講者数、言語教育科目の履修者数。英語インテンシブ・プログラム受講者のTOEFLの成績。	A	A	A	A	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 言語教育研究センターを教務機構の中に位置づけ、より効率的な運営の体制を構築した。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2014年度からの実施に向けて、教務部との連携がより緊密になった。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 2014年度からの本格的な実施により、今後の改善策を検討するが、言語教育研究センターとして、全学の学習者に向けたカリキュラム開発と開講を行っている。そのために、各学部のニーズを取り入れることが十分にできない場合がある。今後は、English for Specific purposes を実施しやすい学部開講の言語教育との連携とその運営に関して議論することができる。	☆
		その他	☆

目標2	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 中等教育の英語教員の研修プログラムは継続して実施した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 目標とする規模拡大にはほぼ到達した。研修プログラムの担当者が言センの英語母語話者の教員のみであるために、日本の中等教育における英語教育の現場を必ずしも把握していないため、英語圏での言語教育やコミュニケーション教育が指導上の規範になりがちである。日本における言語教育という文脈を配慮するとともに、一層の改善が求められる。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 本学の英語教育は、北米の英語圏を強く志向してきた。今後のグローバル人材育成に十分に対応するために、世界を施行しなければならない。世界の英語使用者、とりわけアジアの英語をも顧慮することが大切である。グローバル化する世界と、日本の位置するアジアの両方を顧慮し、言語教育の文脈化を図ることで、英語教育の新たな展開が期待できる。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできた 言語教育のカリキュラムデザイン、カリキュラム開発と教材研究、言語教育に関する研究をそれぞれの言語の教育委員会、またその言語の共同研究で継続して行った。2009年以降は教育学部、国際学部の設置に対応した。また、グローバル人材育成のためのカリキュラム開発に関する議論が始まった。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 英語インテンシブ・プログラムの改編の議論をはじめた。グローバル人材育成は、英語中心で予備的議論が進められた。グローバル人材育成や学習者ポートフォリオの導入を、英語以外の言語でも検討することが今後の課題である。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 英語インテンシブ・プログラムの改編は主にカリキュラム開発に関する議論である。数値目標だけではなく、質的に改編向上させるための工夫が必要である。また、主に学部別で開講していた形態を全学の学生を対象にして開講形態にすることが求められる。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
備考			☆